

実践研究

外国語活動・外国語科 実践研究部

研究主題

令和の日本型学校教育

小中の学習の連携を図り 言語活動を通じた指導の研究

所沢中学校	小濱健太郎（リーダー）
所沢小学校	野呂慎太郎
小手指小学校	西野有佳里
西富小学校	今村 智樹

担当指導主事

清水 航

外国語活動・外国語科実践研究部

I 研究主題

「令和の日本型学校教育」

～小中の学習の連携を図り、言語活動を通じた指導の研究～

○児童生徒の実態 二極化による児童生徒の主体性の低下

学齢が増すにつれ、英語が得意な児童生徒とそうでない児童生徒の**二極化**が進む。塾や家庭で英語に触れる機会がある児童生徒は有利だが、そうでない児童生徒は学校の授業だけでは追いつけず成績が二極化する。

さらに、学年が上がるにつれ「**分からない**」「**失敗を恐れる**」「**他者の目が気になる**」等の精神的な要因も重なり主体性が損なわれてしまい、その差が開いてしまう。小学6年生で「英語の学習が好きですか」と質問に否定的に答えた児童の割合は、2013年度の23.7%から2021年度には31.5%へ増加した。（文部科学省・全国学力学習状況調査）

また、英語を使う場面が限られる日本特有の**環境的要因**も考えられる。

→目指す児童生徒像 主体的に活動する児童生徒集団の形成

仮説 個別最適な学びと協働的な学びや言語活動を充実させることによって、主体的に活動する児童生徒集団の形成に繋がるだろう

二極化による
主体性の低下



- ①相手意識、目的・場面・状況を設定した**言語活動**
- ②**個別最適な学びと協働的な学び**を取り入れた授業
- ③掲示物などの**言語環境の整備**

主体的に活動する
児童生徒集団の形成



【教師】それぞれの児童に適した授業 【児童】学力の向上

II 実践事例

①相手意識、目的・場面・状況を設定した言語活動

「日本各地の料理を楽しむために、都道府県レストランを開こう」という本物のコミュニケーションを行うような場面を設定する。レストランごっこを行い、店員と客になりきってやり取りをする。プラスワンリスト（会話フレーズ集）を掲示し、児童同士のコミュニケーションが深まるようにする。また、単元ごとの「CAN DOチェック」で児童、教師ともに到達度を把握する取組を行った。

（第5学年「Unit 6 At a restaurant.」）

Unit 6 第5学年 国語 食とレストラン 日本各地の料理を楽しむために「おすずめランチセッ ト」を開いて、グループでレストランを開こう。		一月一日 (一)
CAN-DO チェック		
「 <u> </u> 」に「 <u> </u> 」に話したり、練習をたずねたりするやり取りを できる。	<input type="radio"/>	A B C
「 <u> </u> 」に話したり、練習をたずねたりする ことができる。	<input type="radio"/>	A B C
「 <u> </u> 」に話したり、練習の文字の名前を聞き取っ たりして、中文字を書くことができる。	<input type="radio"/>	A B C
ここに記入できます		<input type="text"/>

友達の好きなものを聞く活動に、「友達の意外な一面を知ろう」という目的を付け加えることで、多くの友達とやりとりをしたくなるような相手意識、場面設定をした。

（第3学年「Unit 5 What do you like?」）



好きな漢字について、画数をヒントに互いに聞き合う活動を設定したことで、自然と「How many〜?」が必要になる場面を作り出した。（第3学年「Unit 3 How many?」）



②個別最適な学びと協働的な学びを取り入れた授業

言語材料を教える際に、単に教師から発音の仕方等を教わるのではなく、例えば児童と教師とで1対1のやり取りをしながら聞かせたり、児童同士でやり取りをさせてみたり、児童全員で教師に質問させたりと、ペアワーク・グループワーク・全体指導等を行いながら、主な言語材料に触れさせる機会を設けた。

（第3学年「Unit 5 What do you like?」）



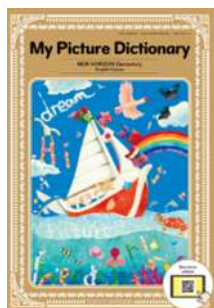
※代表児童同士が会話をしている様子

学習者用デジタル教科書の視聴、動画撮影（自分の話している様子を撮影し自己評価・自己調整をする）、副教材『My Picture Dictionary』での語彙の補充学習、フォトワードの活用*¹、など、多様な学習ツールから自分の課題に応じた学び方を選択できるようにする。（第5学年「Unit 6 At a restaurant.」）

(1)個別学習中の様子



(2)MPD



(3)フォトワード



*1「フォトワード」佐藤 亮輔（北海道教育大学 准教授）、福谷 遼太（高知大学 講師）、本間 里美（北海道教育大学 講師）作成

ペア活動・グループ活動を通して、協働的に学び合えるようにする。中間指導を入れる際には、児童の発言を取り上げ全体に広める。（第5学年「Unit 6 At a restaurant.」）



やり取りに不安を感じる児童のために、お互いが肯定的な声掛けを行えるように「英語のふわふわ言葉」を使うことを奨励した。対話の中で活用している児童を称賛し、意欲的に活動できる雰囲気となった。

（第3学年「Unit 3 How many?」）



③掲示物などの言語環境の整備

日常的なものや学習した内容と関連付けた掲示物を作成し、英語に触れる機会を作った。（月、曜日、時間割、方位など）

プラスワンリスト（会話フレーズ集）を作成し、児童に活用を促すことで、言語活動が豊かになるよう工夫した。



Ⅲ 成果と課題

○成果

①相手意識、目的・場面・状況を設定した言語活動

- ・実際に使えるような目的・場面・状況を設定したことで、**相手意識**を持って主体的にコミュニケーションを取ることができた。
- どの校種においても「相手意識、目的・場面・状況の設定」を工夫することで、言語活動の効果を一層高めることができる。

②個別最適な学びと協働的な学びを取り入れた授業

- ・自分の学習課題に応じた学習方法を選択することができた。
- ・単元ごとに取り組んだ「**CAN DOチェック**」は、児童が自分の成長を実感することもでき、自信を持つことにもつながった。
- ・**ペア学習**を多く取り入れたことで、英語表現に慣れ親しむことができた。また、教え合いや学び合いが生まれ、**協働的な学び**ができ、苦手な児童も活動に参加することができていた。
- ・3年生は高学年より反応がよく、活動に**積極的**に参加できていた。
- ・「**ふわふわ言葉**」をリアクションに使わせた点が主体的な活動を促した。

③掲示物などの言語環境の整備

- ・教室掲示物や活動内で**英語に触れる機会**が多く設定され、児童が活用できた。

○課題

- ・活動が複雑になる時、**目的意識**を教師、児童がより持てるよう内容の精査が必要であった。
- ・個別学習を行う際、児童一人ひとりが**課題意識**を持って選択できるまで年間を通して行う必要があった。
- ・小中の学習の連携において、同一中学校区の小学6年生と中学2年生でGoogle Classroomを活用した交流授業を計画したが、教育課程の違いや、所沢市情報セキュリティポリシー上の課題等の難しさがあった。小中連携の推進は必要だが、様々な配慮事項を踏まえ、児童生徒にとって効果的な単元計画を作成していく必要がある。

児童が学習を主体的に取り組むための、目的を意識した授業づくり



成功体験 英語が「できる」「分かる」

二極化を防ぎ、学力向上につながる